

人生すごろくゲーム～世界で活躍する日本人～

目的: 世界で活躍するウチナンチュの存在を知ることによって多様な仕事や生き方があることを学ぶことができる。自分の人生すごろくゲームを作ることによって自己の将来を見つめ直して考えることができる。

対象: 小学生以上

時間: 100分～

準備するもの: 人生すごろくゲーム、穴埋めシート、サイコロ、パワーポイント、映像資料、テレビ

進行	学習者の活動	進め方とポイント
導入 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> モリング Tea タイム 学習の目的、内容の説明、 向井さんの紹介 	<ul style="list-style-type: none"> 緊張をほぐすためモリング Tea を飲む。 この時間にどのようなことをやるのか(ねらいやみんなと考えたいことなど)を説明する。 パワーポイントを見ながら、向井さんのイメージを広げる。
展開 (80分)	<p>・「国際協力について考えよう～食べ物を通して」</p> <p>・「世界で活躍するウチナンチュ 向井信郎さん人生すごろくゲーム」</p> <ul style="list-style-type: none"> ゲームを開始 ゲームを通して、向井さんがどういう人生を歩んだのか、海外に出ること日本で過ごすこと自分の意見を全体で共有する。 「自分の人生すごろくゲームを作ってみよう」 自分の人生すごろくゲームを作ることを通して、自己の将来の生き方について考える機会とする。 	<p>資料①～食べ物を通して～を活用して、一杯の沖縄そばから沖縄と外国の関わりについて知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> 自作パワーポイントを見ながらザンビアで活躍するウチナンチュ 向井信郎さんの活動内容について知る。 人生すごろくゲームをしながら向井さんの人生を追体験していく。 <p><u>ルール</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 順番にサイコロを振って矢印の方向に進んでいく。進んだ場所に書かれていることを必ず読み上げながら向井さんの体験を振り返る。 人生の分岐点(日本 or 海外)では必ずサイコロの目が揃わないと前に進めない。 <p><u>ルール</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 空欄の人生すごろく表に自分のこれまでの人生、これからの自分の歩みたい人生を記入する、ルールは向井さん人生すごろくゲームと同じ。 <p><u>補足</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 人生の分岐点では必ず行きたい国を選択し、海外に出た自分と日本にとどまる自分の2つの人生を考える。 互いの意見を尊重しあうように助言をする <p>それぞれの人生すごろく表を聞き、グループで共有する。</p>
まとめ (10分)	<ul style="list-style-type: none"> 感想を共有する 	<ul style="list-style-type: none"> 気づいたこと、考えたこと、感じたことを共有する。

視覚教材



向井信郎さんインタビュー:

沖縄県出身向井信郎さんのインタビュー映像。青年海外協力隊に応募した動機やザンビアでの活動取材した映像。映像は JICA 沖縄図書館で貸出している。

学習後の展開:

- ・ 自分ができる国際支援について考える。
- ・ 食の大切さについて考えてみる。
- ・ 自己の将来の生き方について考える。等

だし(かつおぶし)
輸入9.7% (中国)

エビ 輸入45%
(ベトナム)



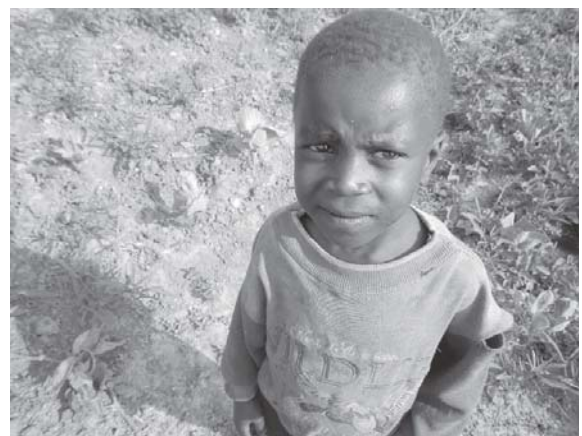
そば(実) 輸入97.3%
(中国など)

原料の大量生産に成功 主食シマ→

飢餓はないとさ
れている

～ザンビアの現状～

栄養失調



日本の食べ物の現状

年間生産量 米
約 850 万トン



年間食品廃棄物
約 800 万トン



毎日おにぎり約 2 個分を
捨てていることとなります



～モリンガの普及～



モリンガ ツリー

<写真解説>

<p>だし (かつおぶし) 輸入 9.7% (中国)</p> <p>豚肉 輸入 5.2% (アメリカなど)</p> <p>小麦粉 輸入 8.5% (アメリカなど)</p>  <p>場所: 沖縄県 写真: 沖縄そば</p>	<p>沖縄そば一杯からでも世界との関わりが感じ取れる。ダシはかつおぶしからできているが約10%が輸入に頼っている、豚肉は約50%、小麦粉においては85%を輸入している。沖縄そばを作るにも海外から輸入している材料を使わないと食べることができない。</p>	<p>年間生産量 米 約850万トン</p> <p>年間食品廃棄物 約800万トン</p> <p>毎日おにぎり約1~2個分を捨てていることとなります</p>  <p>場所: 日本 写真: 日本の食べ物 年間消費量</p>	<p>日本では年間約800万トンの食品廃棄物が出ている、日本のお米の生産量が約850万トンなのでおにぎりを毎日1個~2個捨てていることになる。</p>
<p>場所: ザンビア 写真: ザンビアの食料事情</p> <p>~ザンビアの現状~</p> <p>飢餓はないとされている</p> <p>栄養失調</p> 	<p>ザンビアでは主食であるシマの材料となるメイズ(白いトウモロコシ)の大量生産に成功したため、飢餓はないとされている。しかしシマにはビタミンやミネラルが豊富でないため、お腹は満たされているが栄養が足りない状況である。</p>	<p>場所: ザンビア 写真: 奇跡の植物</p>  <p>活動報告 ~モリンガの普及~ モリンガ ツリー</p>	<p>生命の木とも言われているモリンガツリー、カリウムやビタミンなどの栄養素が豊富である。青年海外協力隊員の向井さんはこのモリンガツリーをザンビアに普及させることで栄養素が足りない現状を救おうとした。</p>

今年で沖縄生活も11年目に入る。生まれ育った故郷三重県との生活の違いに、カルチャーショックを受けたことを今でも鮮明に覚えている。手を挙げないと止まらない路線バス。また、お弁当屋さんで初めて行った時、財布には1万円札しかなく、それを店主に伝えると「お金は要らないよ」と言われ満面の笑みでお弁当を渡してくれたこと。私はウチナンチュのおおらかに感激した。

同じ日本でありながら、生活する上で多くの違いがあることに衝撃を受けた。と同時にその違いを面白く感じた。このような体験をきっかけに私は文化の違いに興味を持ち、その後、その違いを確かめにアジアを中心に世界23カ国を旅した。

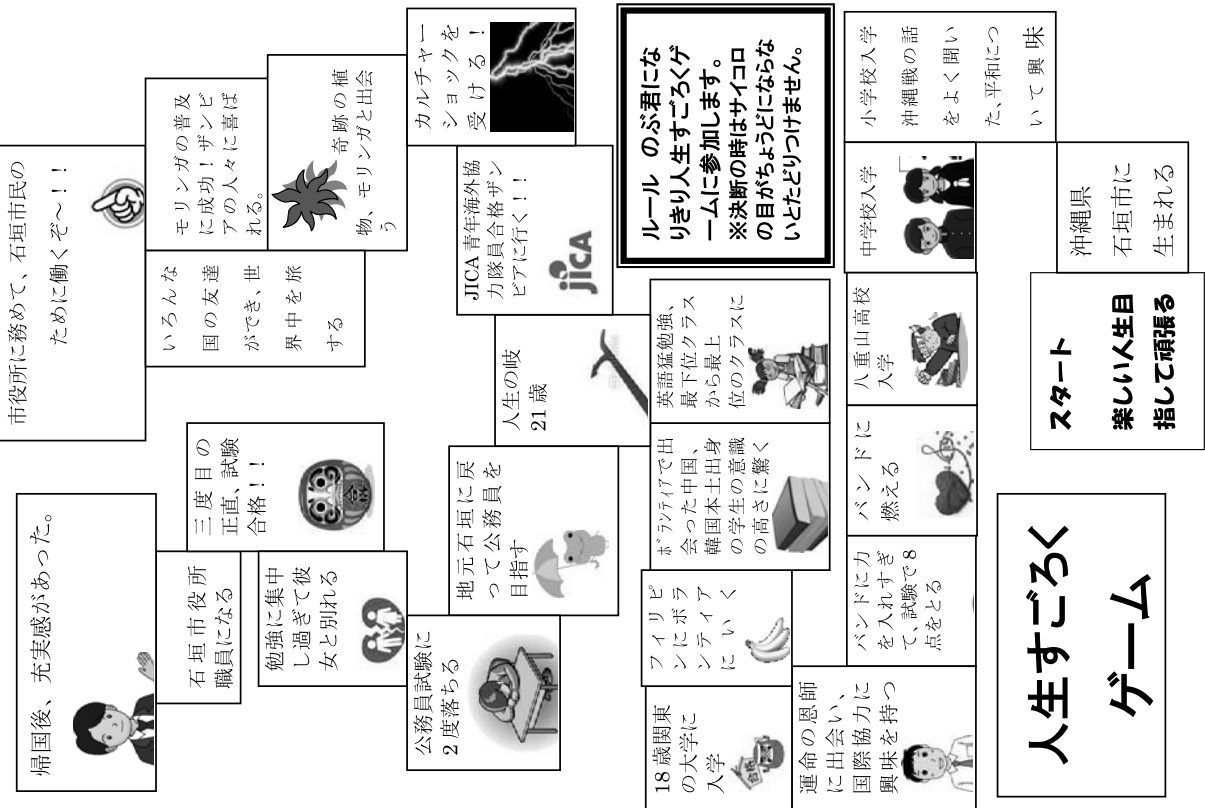
茶のみ話

国際理解教育 森 陽平(31)

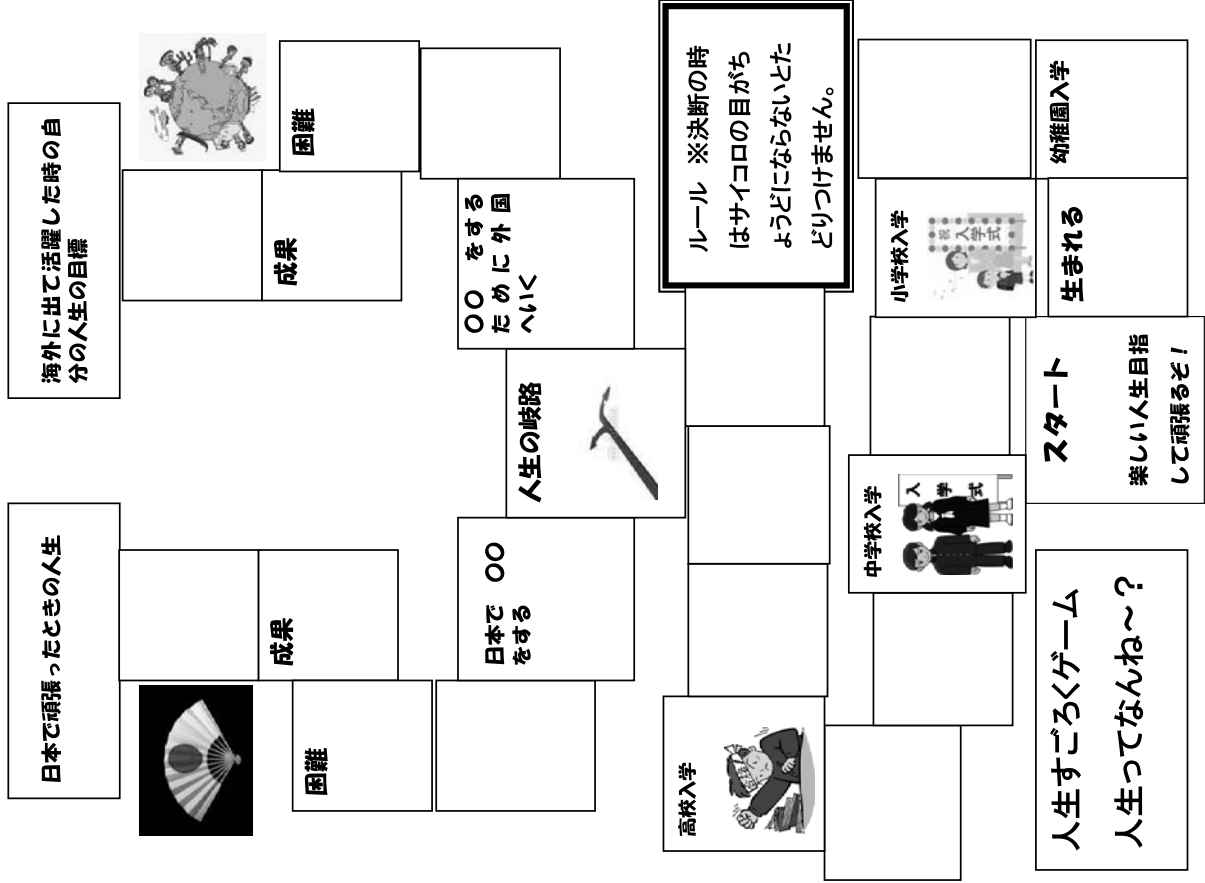
今月下旬、私はJICA教師海外研修でアフリカ大陸「ザンビア」に研修員として2週間滞在する。厳しい環境の中で、どのような教育がなされているか? 自分の目で確かめることができる絶好の機会を得た。中でも青年海外協力隊員として活躍するウチナンチュとの面会が楽しみである。今回の研修で、見たことや感じたことをしっかりと持ち帰り「文化の違い」を生徒に伝えることを私の今後の使命としたい。沖縄とザンビアの違い、さらに世界で活躍するウチナンチュの存在、それらを生徒らに伝えることで、異文化体験の楽しさやウチナンチュとしての誇りを持たせたい。そして生徒個々の将来を見つめるきっかけになればと思う。(沖縄市、特別支援学校教員)



＜教材 4＞向井信朗さんのすごろくゲーム



＜教材 5＞自分のすごろくをつくってみよう



貧困でも明るく笑顔

JICA沖縄県教育委員会連携事業として、県内の教員8人が7月8日にアフリカのザンビア共和国を訪れた。現地の教育現場の視察や住民との文化交流を通して、両国のかけ橋となることを目指している。現地の様子を4人の先生に寄稿してもらった。

先生の見た

ザンビア

2014 JICA 研修

▲1

上野小学校 安田百合子

ザンビアは独立50周年を迎え、アフリカ大陸南部の内陸の国である。首都ルサカを中心部には近代的な建物や沖縄と同規模のショッピングモールも数カ所存在し、にぎわう様子が見られる。生活の必需品は自家用車で、昨年より交通量が増え、渋滞も増えてきたとのことだ。そこは向う日本の中土東部にあふれていて、思わず日

本と動違いうるほどである。

首都から少し離れると、トウモロコシ畑やサトウキビ畑が広がっている。サトウキビをかりながら歩く少年、荷物を頭上に乗せて運ぶ女性、水くみをする子どもたち、マシニコルムハウシやカヤクミ屋根の家も存在する。都市の中でもコソバウンスト(スモウバウスト)が存在し、貧困層の方々が身を寄せ合って生活している。

食事は1日2食で、メイズ(トウモロコシの粉)で作ったシマが主食であるが、栄養面に偏りがあり、いまだに栄養失調も多いという。そしてHIV陽性者は成人の13.5%(7人に1人)に達し、働き盛りの年齢層の減少が顕著である。雨期にはマラリア等の病気も多く、国民の平均寿命は46歳とい

ふだ。

このころが観光客の目当てにしたが、人々は笑顔であふれている。教科書もないが一生懸命学ぶ子どもたちが、跳ねない手作りのボールをばたきで蹴ってサッカーをしていた子どもたちの腫が忘れられない。「Hi」「Hello」「Good morning」。出会った多くの人が、他国から来た私に笑顔で声を掛けてくれた。私は沖縄で外国の方に自ら声を掛けたことはあつただろうか。ザンビアの皆さんの明るく、温厚な心が熱くなり感激した。ザンビアの旅は、豊かな時代の自らの生活を考えさせられる研修であった。



農業支援で県人活躍

先生の見た

ザンビア

2014 JICA 研修

▲2

美咲特別支援学校 森陽平

「ドン・ツク・パ」。素手でたたく大鼓のリズミカルな音にザンビアの人々は自然と体が反応する。キレのある独特の踊りか、誰かに教わるのではなく風土から生まれる表現。踊り終えた子どもたちは取りかきそとにほほ笑んでいる。陽気だがシャイ。どこからチナンチエとよく似ている。

JICA教師海外研修参加者としてザンビアに滞在中、青年海外協力隊員の回井健朗さんに出会うことができました。回井隊員はチナンチエで

あり、村落への農業技術支援と活躍している。

同国の主食である「シマ」は、メイズ(トウモロコシ)をすりつぶして蒸したもので、政府の政策でメイズを大量に作り出すことに成功し、一般的に飢餓はなくなった。しかし、シマにはタンパク質やビタミン、ミネラルなどの栄養素が不足しており、おなかは満たせるが、人々はほぼ栄養失調状態である。

そこで回井隊員は、モリンガという栄養豊富な植物を栽培し、それを食生活に取り入れる活動を推進している。だが、当初は必要性を理解されず、上手いかなったところだ。村落の方々と一緒にシマを食べ、現地のダンスを踊るなど、食生活を共にすることで、徐々に共感を得、活動は実を結んでいった。

私は今回、発展途上で困難な状況

に立ち向かうチナンチエを、実際に目の当たりにした。まさかの姿を生徒たちに伝えたい。それから現地で味わうことのできた、人々の暮らしや風景を紹介したいと考えている。その中で、それぞれの子どもたちが異文化への興味を抱き、郷土である沖縄の良さにも気づくことを期待している。将来の生活への希望に賭けてくちよな活動を、今後も続けていきたい。



学校行けず 貧困連鎖

先生の見た

ザンビア

2014 JICA 研修

▶3

真和志高校

與那原祥

ザンビア滞在は笑顔あふれる多くの子どもたちと触れ合うことができた。その一方で、学校に行きたくも行けない子どももいる。ストリートチルドレンと呼ばれる子どもたちだ。彼らはマーケットで仕事を手伝い、わずかなお金を稼いでその日一日をしのぐ。彼らを担当しているJICAボランティアの一人は「親類、子どもたちを親や親族の元に戻すことが大切と考えていた。しかし、親元へ帰しても満足に食糧が取れずに戻って来たり、

マーケットで友達や大人と一緒に遊ぶことができなかったりする姿を見るうちに、「この子どもたちの幸せって何だろう」と悩むうちになつたという。それでも「このまま一生マーケットで生活するよりはできない。教育を受け、自分自身で未来を切り開き、本当の幸せを感じてほしい」と願いながら活動を続けているとのことだ。

JICAザンビア事務所の所長は「教育を受けられないストリートチルドレンがやがて薬物や売春に手を出し、HIV感染者となって出産した結果、子供も感染し貧困が拡大する」という負のスパイラルが生じている」と指摘する。

ザンビアの人々は「チチンチコ」同じく「互いを繋ぎつづけていこう」とや、貧しくてもおろかな「なんくるないさー」の精神を持っていると感じた。これは地元の人々がなくしてはならな

い大切な心の部分だ。この「心」を軸とし、将来を担う子どもたちにも良い環境をつくるために、目の前の課題を改善し続ける努力がザンビアにも沖縄にも求められている。

この研修で「Think Globally, Act Locally」を学んだ。国際的視野で考え、地元で誇りを持ち、自分自身を育てることに成長していく生徒を育てていきたい。



授業改善で意欲的に

先生の見た

ザンビア

2014 JICA 研修

▶4

さつき小学校

我那覇ゆり子

東園部アフリカ学力調査で最下位のザンビアは、基礎教育の向上が課題だ。持続的な教員の質向上のため、授業研究に取り組んでいる。

私たちは、4年生の理科の研究授業と授業研究会に参加した。授業の中でグループ活動が始まると、子どもたちの学びが活々するの分かる。

例えば、実物を使って穀物類と根菜類に分ける。実物があることで理解が深まり、記述活動があることで課題について顔を合わせ話し合うことがで

きる。

授業研究会では、多くの教員が参加し、州全体で授業改善に取り組んでいた。私たちが積極的に意見を交わし、ザンビアも沖縄も、育てたい子どもの姿は同じだと感じた。

教師の工夫が子どもたちの意欲を引き出し、「学ぶって楽しい！」という気持ちにあふれた授業だった。キラキラとした瞳と楽しそうに学ぶ子どもたちに、無限の可能性を感じた。

一方、厳しい教育事情も痛感した。ボランティアで運営される学校は教科書はなく、書架教室。無資格の教師や、異年齢で構成される教室もある。

授業は英語で行われるが、仲良く作った男子は自分の名前をアルファベットで聞かせ、自分の夢「Pilot」を書けなかった。13歳を31歳とも。こうした現象は氷山の一角にすぎず、解決すべき課題は山積している。

想像を上回る厳しい教育環境の中で、授業研究と教育の改革に励む教員と、すてきな笑顔で意欲的に学ぶ子どもたち。そして現地の教育に奮闘する協力隊の姿が印象的で、人々はエネルギーにあふれていた。未来のザンビアは、教育環境の整備次第、スピードに乗って大きく成長していくであろう。

＝おわり



ザンビア共和国で、青年海外協力隊員として活動し、今は帰国なされた向井さんの執筆。ザンビア滞在中、大変お世話になりました。

沖縄人としての国際協力

私が青年海外協力隊として活動していたのは、南部アフリカ中央に位置するザンビア共和国という内陸国である。現地では、ザンビア農業畜産省の地方農業事務所へ配属され主に農業普及を行っていた。

協力隊に参加したキッカケは、「平和」への強い関心からだった。子供の頃から沖縄戦に興味があり、将来は平和に携わるような仕事がしたいと思っていた。少しずつ大人なるにつれ、海外には未だ紛争や貧困で平和に暮らせない人達が多くいることを知り、そんな人達のために仕事がしたいと思い青年海外協力隊に参加を決意した。2年間の活動では、貧困削減を目的とした稲作の普及と高い栄養価を含むモリンガの木の普及を行ってきた。活動中は、全く違う言語、文化、自然環境など慣れるには時間のかかることも多くあった。しかし、そんな厳しい環境の中いつも私の支えになったのが「なんくるないさ～」の言葉である。厳しい環境下での活動は、思うようにならない事の方が多い。そんな環境の中、いかに今を楽しみながらプラスの方向へ向かっていくか考えた時、この言葉が最も合う言葉だった。帰国した今、ザンビアで得た貴重な経験を沖縄の平和と発展に活かしていきたいと思っている。

（青年海外協力隊、向井信朗さん沖縄県石垣市出身）



派遣メンバーで作成したオリジナルTシャツ
参加者の森陽平さんデザイン
Tシャツへの想い: 郷土愛。沖縄とザンビア、お互いの良き文化が尊重しあえるように！

随員 感想



水きくジャンプ
若杉さん!

ザンビアは私も初めて訪問しましたが、訪問したことのある他のアフリカ諸国ともやはり一くくりには出来ず、首都が高地にあり寒いことや活気の中にも穏やかな印象が強いザンビア人が印象的でした。また、予想以上に大きなショッピングモールが多数あることも驚きでした。そして、途上国に行く度に感じますが、やはり貧しい中でも輝いている子どもたちの笑顔が最も印象的でした。

グローバル化の中で存在感が急速に高まっている途上国やアフリカは、近い将来にも日本にとってはより大きな存在になると思います。参加された教員の皆様は、チームワークと前向きな努力により、ザンビアでの滞在や前後の研修を活用し、そして帰国後の授業実践や教材開発もしていただきましたが、今後もぜひ世界の現状や多様性を日本の子どもたちや周囲の方に伝え続けていただければと思います。私も今回の経験を教師海外研修の次年度以降の実施や制度自体、さらにはJICAの他の事業にしっかり活かしていきたいと思います。

最後に、現地の人達とともに生活して頑張る青年海外協力隊や専門家の皆様や30年以上にもわたり故郷の沖縄を想いつつザンビア人として尽くす高良初子さんに敬意を表するするとともに、沖縄NGOセンターや沖縄県教育委員会、その他ご支援いただきました皆様に感謝申し上げます。

(沖縄国際センター 若杉裕司)



ドライバーのブライアン
& 随員の玉城

昨年に続き二度目の随員および訪問国ザンビア共和国。JICA 職員、受け入れて下さる協力隊員からドライバーまで昨年と同じ顔の方々との出会いは心強いものでした。町は工事ラッシュではあり、昨年よりもラッシュの列が長くなっていましたが一年前の記憶も定かであり、懐かしい場所に帰った気分になり、あそこへ行こう、ここへ行こうという気持ちがどんどん芽生えてきたことは本当にザンビアで良かったと実感しました。また昨年度の参加者の積み上げがあったからこそこの今年の素晴らしい研修につながったと感じております。

派遣者が決まって派遣前研修から派遣後研修、教材作成までの期間、参加者8名の皆様とのおつきあいは長く、昨年同様、小さなハプニングにあいながらも楽しみながら乗り越える姿には感心しきりでした。教員の皆さんは常に現地の子供たち、教育事情および社会的な背景に心を寄せ、沖縄に帰ったらこれも伝えよう、あれも伝えようという意識や行動力は本当に素晴らしいものでした。お一人おひとり、性格も異なり、教え子どもや教科も異なるので各個人の向く視線や方向性を互いに調整しながら絶妙なバランスとチームワークを発揮し、とても充実した研修期間になったと感じています。

本研修は派遣の2週間が本番ではなく、派遣が決まってから教材作成、さらには次年度の皆様への還元までが研修です。楽しいことばかりではなく、日々、教育現場で多くの職務に接しながらも本研修も併せてこなしていく姿勢に本当に感謝の気持ちでいっぱいです。これからも本研修を通して既参加者が現場でいきいきとザンビアのことを伝える日々につながり、遠いアフリカ・ザンビアと沖縄の懸け橋になりますよう心より祈念を申し上げます。ジコモカンビーリ！（大変ありがとうございました）
(沖縄NGOセンター 玉城直美)